

議会広報広聴委員会記録

令和8年8月10日（月）

13：32～14：48

第4委員会室

【出席者】大谷委員長、岡山副委員長、
西田一平委員、今田委員、遠藤委員、花田委員、戸津川委員、沖田委員、
笹田委員、岡本委員

【事務局】濱見書記

議題

1 地域井戸端会の反省・課題について……………資料1

(1) 「地域井戸端会」の反省点・課題など

(2) その他

2 その他

【別紙会議録のとおり】

【会議録】

[13 時 32 分 開議]

○大谷委員長

ただいまから議会広報広聴委員会を開会する。出席委員は定足数に達している。

1 地域井戸端会の反省・課題について

○大谷委員長

今後の方向性を協議したい。反省点・課題についてとりまとめた状況を事務局に説明を求める。

○濱見書記

資料1は、前回の委員会でも示したが、各常任委員会が出た地域井戸端会に対する意見や反省点、課題をまとめたものである。3常任委員会の意見のほか、アンケートや当委員会が出た意見などを集約している。

項目は、1「開催方式・イベント形態の見直し」、2「参加者の偏りと周知・集客の課題」、3「当日の運営・進行に関する課題」、4「市民意見への対応とフィードバックのあり方」、5「事前準備・日程調整などの運用上の課題」の5つに分類している。

本日はこれらについて各委員の意見を聞き、今後の改善策や進め方について協議したい。

○大谷委員長

事前に配付した資料の反省点・課題の中で、確認しておきたいことはあるか。

(「なし」という声あり)

開催方式・イベント形態の見直しについて、これまで4年間、まちづくりセンターを中心とした28か所で実施してきた。この方向性を継続するかどうかについて協議を深めたい。各委員の意見を求める。

○今田委員

新人議員が増え、今回から新人議員も関わることになったため、昨年までとは違った雰囲気になっている。次回までは同じ形で実施し、参加者の増減などの状況をもう一度見極める必要があると考える。反面、マンネリ化や参加者・意見の固定化は課題である。これを改善するためには、地域ごとに回るのはではなく、テーマを設けて回る方法も一つである。テーマや対象者を決め、各地の団体などを訪問する形に改善してはどうか。

○大谷委員長

これまでどおりの方向性の中で改善していくということか。

○今田委員

来年までは今回の検証も踏まえて同じ形態で実施するのも一つの手かもしれないが、今回参加して課題も感じたため、大きく変える必要もあると考えている。

○戸津川委員

今回初めて参加したが、3名の議員で28か所を対応するのは議員の負担が大きいと感じている。まちづくりセンターを中心とした開催は必要であるが、箇所数を見直すべきである。まちづくりセンターでの開催に加えて、グループや事業体などに出向いて意見交換を行うなど、ハイブリッド的な形が必要である。これまでの形を全て変えるのではなく、箇所数を減らして参加を呼び掛ける機会を設けつつ、特定の事業体などに出向いて意見交換をする方式を取り入れても良いと考える。

○大谷委員長

どのような事業体を指しているのか。

○戸津川委員

例えば商工会議所や県立大学の集まりなど、特定の事業所やグループに出向いて意見交換をするやり方があっても良いと考える。

○大谷委員長

商工会議所を例に挙げられたが、それでは産業建設委員会などの専門委員会に関わる内容となり、議会広報広聴委員会の対応領域から外れることが想定される。専門委員会の領域は避けるべきである。

○笹田委員

団体などとの意見交換は、重要案件の意見交換会に当たる。議会広報広聴委員会のスタンスは、対象を絞るのではなく、まんべんなく多様な意見を聞くことである。先ほどの提案については、重要案件の意見交換会として実施できるのではないか。

○戸津川委員

ほかにPTA連合会なども考えられるが、意見が偏る可能性もあるためバランスを見る必要がある。要望があった会へ出向くという方式があっても良いと考える。

○岡本委員

担当した三保まちづくりセンターでは、参加者が1名、センター長と合わせて2名という状況であった。過去4年間も似た状況があり、まちづくりセンターに人を集める手法には限界があると感じている。若い方の参加がないため、テーマを設定し、地域で若い人の意見を聞く形を取り入れてはどうか。具体的な内容は思いつかないが、地域井戸端会の形は変えるべきである。

○笹田委員

以前から指摘しているが、平成25年からのデータを見ると、現在の形には限界があると感じている。例えば半年間、まちづくりセンターに日時やテーマを決めてもらい、議員と話したいという要望があれば出向く形にしてはどうか。

まちづくりセンターによっては、議員の訪問を望まないところもあるはずである。その場合、議員が必要とされていないという課題が浮き彫りになるため、呼んでもらえるような議会になる必要がある。現在は無理に開催している状態が続いているため、資料にあるデマンド型のように、要望を受けて訪問する形に変えるべきである。

テーマについても、地域によって課題が異なるため、地域の課題をテーマに設定した方が話しやすいと考える。若い方や母親層の参加が少ないことは10年来の課題で

あり、いろいろと試みたが改善されていないため、一度まちづくりセンターに企画を任せてみるのも一つの方法である。

○沖田委員

地域井戸端会を続けていけばマンネリ化や参加者の固定化は避けられないため、制度自体の変更が必要であると考え。一方で、28か所で開催し、ある程度の参加者が集まっている実績もあるため、これを根本から変えるのには無理がある。

どのような方法が良いかは今後の議論の余地があるが、かつてのように議会報告会と地域井戸端会の両方を実施する形に戻すのも一つの方法である。何らかの活動は続ける必要があるが、業界ごとに出向く形にするかなど、今後さらに議論が必要である。

○西田一平委員

今回参加し、楽しく勉強になったため、開催形式自体は大きく変えなくても良いと考える。ただし、まちづくりセンターの力に頼って集客している現状もあるため、センター長にヒアリングを行い、場合によっては実施しない選択肢も考えるべきである。

また、何をやっているか分からないと人が集まらない。今回、各常任委員会で決めたテーマが参加者に伝わっていなかった。事前周知はあっても、当日の掲示物がなく趣旨が分からない状況があった。テーマを分かりやすく示し、議員側の進行を分かりやすい運用に改善すれば、市民も楽しめる会になり、結果として人が集まるようになるはずである。時間はかかるかもしれないが、面白い会にしていけるべきである。

○花田委員

西田一平委員の意見に同意する。今回3つのテーマがあった中で、産業建設委員会の「100年先に残したい浜田の食」が非常に盛り上がった。場の空気を明るくするか暗くするかは進行次第であり、担当議員のファシリテーターとしての能力が最も重要である。

したがって、事前にファシリテーションの研修やレクチャーを行う機会を設けるべきである。会場によって当たり外れが生じ、二度と参加したくないと思われたいためにも、一律に質の高い会を提供できるスキルが不可欠である。

「食」のテーマが盛り上がったのは、批判的な空気になりにくく、年代を問わず前向きな話ができるからである。このような明るい未来を語れる共通テーマを設定するなど、内容を工夫する余地は十分にある。

そもそも地域井戸端会は市民の声を聞く会であるべきだという三浦市長の考えを聞き、私もそのつもりで臨んだ。意見を聞き出す工夫次第でいくらでも面白くできるため、当面は現在の形式を維持しつつ、内容を改善していくべきである。

また、私は子育て支援センターを担当したが、事前に施設の目的や開催の意図を委員間で共有しておくべきであった。子育て世帯の話聞く場と考えていたが、実際には母親たちに声を掛けても入りづらい雰囲気があり、想定したような会にはならなかった。もしそこをターゲットにするなら、対象を「子育て中の方」に明確に区切る

やり方でもよかったと考える。

○遠藤委員

地域井戸端会自体は実施して良いと考える。参加して楽しく、話したい市民の声をしっかり聞くことは重要である。ただ、28か所全てを回るのではなく、以前出た中学校で開催する案のように、場所を絞って実施してはどうか。

例えば第一中学校で特定のテーマを設定し、興味のある方に集まってもらう。遠方から来にくい場合は、金城中学校など受入れ準備ができる場所を利用する。また、子育て支援センターに複数のテーマを持ち込むのではなく、「子育て」に特化したテーマで意見を募る投げ掛けをした方が集まりやすいはずである。場所に合わせて午前や午後など時間を柔軟に設定する工夫も必要である。

○岡山副委員長

地域井戸端会で大切なのは質の向上である。義務で行うのではなく、参加者が普段思っていることを議員に伝えられたと感じる空気づくりが不可欠である。そのため、事前に話しやすい雰囲気を作るための研修を行うべきである。

実際に出向いた際、3人では少ないという意見もあった。もし人数を増やすなら会場を絞る必要があるため、3人体制が適切か、より多くの議員で対応すべきか、人数と会場の設定をセットで検討する必要がある。

マンネリ化は避けられないが、アンケートでは「楽しかった」「また行きたい」「議員にフラットに話し掛けてよかった」という好意的な声もあったため、地域井戸端会自体は継続すべきである。今後は会場、人数、質の向上を考える必要がある。

○大谷委員長

個人的には、これまでまちづくりセンターを中心に行ってきたが、3人での対応は負担が大きく、また地元議員の参加を求められるなど趣旨が伝わっていない部分もあった。マンネリ化を避けるため、場所を変えるのも一つの方法であり、前回は学校単位の案も出した。

箇所数を絞る点やデマンド型の導入についてはさらに詰める必要があり、場所と人数の設定が今後のポイントになる。

一通り意見が出たが、今後の方向性として、まずは場所をまちづくりセンター中心とするかどうかについて議論したい。この進め方で良いか。

○沖田委員

場所も重要であるが、内容次第である。地域単位か目的団体単位かを考えるなど、まずはマンネリ化をどう打破するかから議論すべきである。先に場所を決めてしまうと、まちづくりセンターへの集約程度の議論にとどまる懸念がある。

○大谷委員長

広く意見を聞くために、当初はまちづくりセンターをベースにすることになったと記憶している。当時も28か所は多いという声があったが、絞り込みが難しく全て対象となった。結果として、各常任委員会から1名ずつ計3名体制とし、議長や委員長が参加できる場合は加わる形になった経緯がある。

○笹田委員

マンネリ化の指摘はあるが、市民にとってはまちづくりセンターでの開催が習慣づいている。場所を変えると周知に一から時間がかかるため、まちづくりセンターをベースとし、内容をどうするかが最も議論すべき点である。

当初は動員で参加者を集めたが、議員が誘うのでは意味がないという反省から試行錯誤を重ねてきた。4年間実施してきた中で内容をブラッシュアップするのはハードルが高いが、まちづくりセンターで開催するという形が定着したことは、議会としてのメリットと捉えるべきである。

○花田委員

今まで実施してきた中で、開催する側だけでなく、参加する市民の側から「どのような形なら参加しやすいか」「この形では参加しにくい」といった意見を聞いたことはあるか。

○笹田委員

もちろんある。アンケートで女性が少なく行きにくいという意見があり、土日に開催したこともある。市民の意見を踏まえ、参加しやすい方向性を模索してきたため、議員だけで決めてきたわけではない。

○西田一平委員

まちづくりセンターでの浸透度を考えると、急に企業や団体中心に変更するとこれまでの積み重ねがリセットされてしまう。まずは開催方式自体は変えず、内容の運営に統一感を持たせるべきである。

産業建設委員会の「食」のテーマについて、私は設定した側として意図を説明できたが、趣旨が分からない議員も多いはずである。テーマを設定した常任委員会がほかの議員に対し、意図やファシリテーションの方法を事前に周知徹底すれば、会場ごとの差を減らすことができる。司会進行表のようなものを作成し、準備を整えるべきである。

来年度も28か所、3名体制を維持し、担当外の議員の発言ルールなど、不足していたルールのみを変更すれば良いと考える。

○今田委員

意見を聞き、大枠は変えずに内容を工夫すべきだと感じた。多くの人が参加したくなるような工夫の余地はまだ十分にある。「地域井戸端会」という名称は若い人には馴染みが薄く、固定観念を持たれがちなため、親しみやすい名称に変更するなど、できるところから改善していくべきである。

○花田委員

これまでにお茶やお菓子を出したことはあるか。

○笹田委員

それはしてはならない。

○花田委員

なぜか。

○笹田委員

それらを目当てに人を集めるべきではないからである。

○濱見書記

緊張をほぐす効果はあると考える。

○笹田委員

目当てに来るわけではないだろうが、その可能性が生じてしまう。

また過去に、市の意見が分かれているテーマを設定した際に人が多く集まったことがあった。関心の高いテーマであれば人は集まると考える。

○岡山委員

広報の工夫も必要である。他議会のように前回の様子を動画でホームページに掲載したり、議会公式LINEやYouTubeで前年度の様子を配信したりすれば、雰囲気は伝わり参加しやすくなる。

現状のケーブルテレビなどでの告知は内容のみであり、前回はどのような雰囲気だったかが伝わらないため、参加への動機付けになっていない。名称変更と合わせて「前回はこのような雰囲気だった」と伝わるような広報の工夫が求められる。

○大谷委員長

様々な意見が出ているが、場所と規模を決定しなければ細かな工夫に進めない。場所と人数についてほかに意見はあるか。

○笹田委員

人数が多すぎると緊張して話しにくいという過去の意見があり、少人数にした経緯がある。3人を負担とを感じるかは各委員によるが、私は負担だとは思わなかった。人数が多すぎるのもよくない。

○岡本委員

現状を肯定的に受け止めている委員もいるため、次回も28か所、3名配置で良いと考える。中身については西田一平委員の提案のようにテーマを工夫していくべきである。

私が担当した波佐では、ほかの会合や総会が重なる時期であった。まちづくりセンターに日程を依頼する際、地域の行事と重ならないかななどを配慮し、事前に意見を求めるべきであった。事前にセンターとしっかり打合せを行う必要がある。

○大谷委員長

現状の形を今後も生かしていくという意見が強まっているが、その方向で良いか。会場はまちづくりセンター28か所、議員は各班3名ずつとし、当面この形で実施するという方向でまとめて良いか。

○西田一平委員

期間を1か月に詰め込むのは議員の負担が大きいため、例えば5～9月など実施期間に幅を持たせてはどうか。今福での開催時も、農繁期で集まりにくいと言われたが、朝10時開催にしたところ13名が集まった。各まちづくりセンター長に適切な時期や時間を事前確認する手順を設けるべきである。土曜日の開催要望もあった。

○大谷委員長

夜間はクマが出るため参加しにくいという声もあった。状況によっては土日の日中に実施するのも一つの方法である。

○西田一平委員

担当議員がまちづくりセンターに電話し、柔軟な期間の中でいつが良いかを相談するか、あるいは正副委員長が事前に全体的な打診を行っておくべきである。

○笹田委員

先ほど6か月程度と述べたが、6月や9月は定例会議があり動きづらいため、その時期を避けて日程を決めるべきである。また農繁期を避けてほしいという要望は以前からあるため、参加しやすい時期を地域で決めてもらうのが良い。議会会期中を避け、4月からの半年間程度で日時を設定してもらうのが現実的である。

○今田委員

まちづくりセンターは地域性を把握し、人が集まりやすい時間帯を知っているため、事前の調整が重要である。また、夕方6時半は子育て世代にとって家事で忙しく参加しにくい時間帯である。土日の昼間に設定するなど、様々な世代が参加できる工夫を今後の検討に含めてほしい。

○岡本委員

一つ提案がある。テーマを設定するにしても、都川での道路問題のように、あらかじめ住民が意識している課題が出されることがある。事前に「地域の課題は何か」という投げ掛けを行えば、設定テーマに加えて地域独自の課題も拾い上げることができる。

○大谷委員長

改めて方向性を確認するが、まちづくりセンターをベースとし、これまでどおり3人体制で28か所を実施するということで良いか。

(「はい」という声あり)

その上で、実施期間と班編成のタイミングについてだが、従来は各常任委員会のメンバーで班編成を行い、担当箇所を均等に割り振っていた。担当決定後、3名の日程が合う日を候補とし、まちづくりセンターの空き状況を確認する流れであったが、この流れも同様で良いか。

○今田委員

班編成に地元議員を入れてほしいという要望や、地域住民から地元議員の参加を求める声もあったため、その点の議論が必要である。担当の3名以外の議員が参加して良いかどうかのルールにも関わるため、今後の工夫として検討すべきである。

○笹田委員

当初その点は議論になり、地元議員の割当てを試行したこともある。しかし、現在は「地元ではなく浜田市全体の議員である」と説明している。地元割当てをすると特定の地域しか見えなくなるため、全体を考える視点から、どの地域の出身であっても全員で対応する旨を説明している。

○今田委員

その意見は理解しており、我々も同様に回答している。「他地域の議員にも地元を見てほしいし、地元議員も市全体の議員である」と説明しているが、どこまで理解を得られるかが課題である。現状ではそのように説明して対応している。

○西田一平委員

地元色を強めると、地盤のない議員は担当地域がなくなってしまう。市議会議員としての公務であり、個人の政治活動ではないため、むしろ地元以外の地域を担当する意識で臨むべきである。

○今田委員

そのためには、地元以外の議員であっても、地域の細かな要望が出た際にそれを把握し、理解する努力が必要である。現地に足を運ぶなど、分からないで済ませない姿勢が求められる。

○大谷委員長

これまでどおり、バランスを考慮した班編成とし、過去に行っていない地域も満遍なく担当できるような編成とすることで良いか。

(「はい」という声あり)

○西田一平委員

名称について、「地域まちカイギ」への変更を提案する。「地域」は漢字、「まち」は平仮名、「カイギ」は片仮名にして柔らかさを出す。「地域井戸端会」では趣旨が伝わりにくい、「地域のこと、まちのことを話す」と分かれば良い。「地域まちトーク」なども考えられる。

○今田委員

「浜田の未来カフェ」などはどうか。

○西田一平委員

カフェではない。

○今田委員

お茶は出さなくても、気軽に話せる空間というイメージである。

○大谷委員長

イメージとして、ネーミングは重要である。

○戸津川委員

当初の説明では参加者を分けてグループ討議を行う形式であったが、実際には全体を一つのグループとして一対一でやり取りし、雰囲気は非常に良かった。グループごとに意見をまとめ、代表者が発表する形式は進行が難しいと感じる。対面で直接意見を交わす方が雰囲気が良い。方法を統一すべきかは分からないが、自由に発言できる形式が望ましいため、進行方法についても議論しておく必要がある。

○大谷委員長

参加人数が事前に分からないため、当日の人数を見て班分けを判断するケースが多い。1、2人なら当然全体で行うし、6人なら分けるべきか、現場で悩むのが実情で

ある。

○笹田委員

私の担当箇所では20人が参加したが、班分けはしなかった。ロの字型に座り、自由に意見を出してもらった。雰囲気良く、全員の意見が共有できた。グループを分けるとほかのグループの意見が分からなくなることを危惧し、最初から分けずに実施すると決めていたため、20人でも問題なく対応できた。

○花田委員

人数や雰囲気にもよるが、社会教育的な観点からは分けるべきである。全員の前で手を挙げて発言できる人は少ないが、少人数のグループなら話せるという人もいる。グループ分けは、発言しにくい人の声を聞くための社会教育的な手法である。三浦市長もグループ分けの重要性を強調しており、私も同意見である。人数次第であり必ず分けるべきとまでは言わないが、分ける目的は理解してほしい。

○今田委員

冒頭で花田委員が指摘したように、ファシリテーションの質の向上は必須である。意見を引き出し、発言しやすい雰囲気を作るためにも、当委員会の全メンバーが研修を受ける必要があると考える。

○大谷委員長

ここで暫時休憩する。

[14 時 40 分 休憩]

[14 時 48 分 再開]

○大谷委員長

会議を再開する。

開催形態は決まったため、次に親しみやすい名称への変更と、実施期間について大まかに決定したい。これらについて意見を求める。

○遠藤委員

西田一平委員の提案が良いと考える。

○大谷委員長

「地域まちトーク」で良いか。表記は漢字の「地域」、平仮名の「まち」、片仮名の「トーク」とする。

(「はい」という声あり)

次に開催時期について、一定の幅を持たせるべきとの意見があった。まちづくりセンターにどの程度の幅で案内すべきか、意見を求める。

○沖田委員

例年5月第2週から6月第1週頃に各班で日程を割り振っているが、次年度の予定を早い段階でまちづくりセンターに提示してもらうべきである。そうすればセンター側も年間行事予定に組み込め、早期からの周知が可能になる。早めに開催期間を決めて

もらい、その中で議会から班を割り振る手順の方が、周知や日程調整の面でも有効である。

○大谷委員長

開始は5月半ば頃からとするが、終了時期について意見はあるか。

○笹田委員

幅を持たせるため、議会がある6月と9月を除き、5、7、8、10、11月の5か月間で設定してはどうか。現在の実施期間は農繁期と重なることが多いため、ほかの期間も選べるようにした方が参加しやすくなる。

○大谷委員長

5月半ばから開始し、議会開催月を除いた11月までを開催期間とするという意見で良いか。

(「異議なし」という声あり)

地域の要望も踏まえ、詳細な日程は再度調整するが、5月半ばから11月までを大まかな開催期間とする。

続いて、項目2「参加者の偏りと周知・集客の課題」について意見を求める。

○笹田委員

これは冒頭で出た内容の問題である。内容が変われば参加者も変わるため、課題をどう解消しブラッシュアップしていくかという議論が必要である。

項目2、3、4については次回の課題としてもよく、進行は正副委員長に一任する。

○大谷委員長

この点は次回の協議とする。資料の来年度のレジュメ案についても、今年度の意見を反映させているが、これについても次回に回して良いか。

(「はい」という声あり)

本日の主要な議題は大まかに決まったため、以上で終了して良いか。

(「はい」という声あり)

2 その他

○大谷委員長

次回の議会広報広聴委員会は、8月25日（火）13時30分から開催する。

○演見書記

今回は議会だよりの編集のみを予定していたが、本日の課題の続きも行うことで良いか。

(「はい」という声あり)

○大谷委員長

次回の議論内容については、事務局と打合せを行い、整理した上で提案する。

以上で本日の議会広報広聴委員会を終了する。

[14 時 48 分 閉議]

浜田市議会委員会条例第65条の規定により、ここに委員会記録を作成する。

議会広報広聴委員会委員長 大谷 学